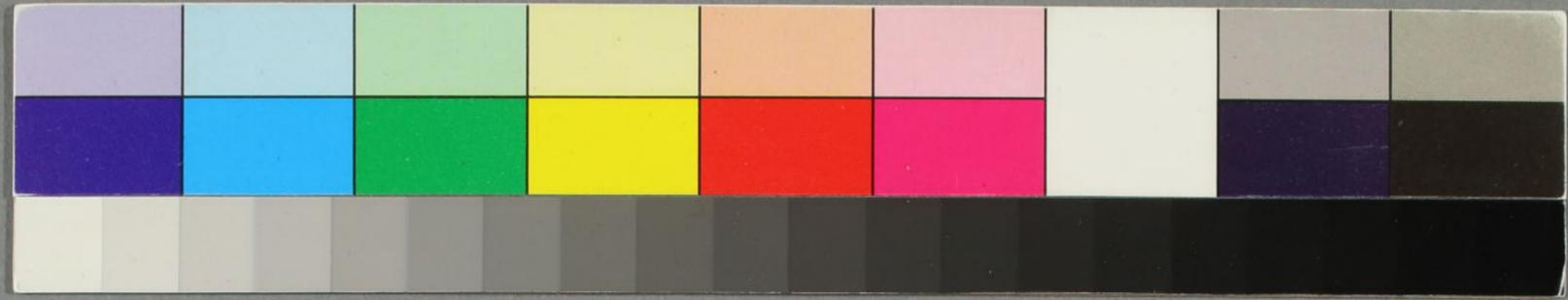


七部婆心錄
 續猿 七
 延室

5
 1261
 6





5

七部 寂心録七卷

曲齋

注

續猿蓑



東林集を仍作と云然と知く

我凡作といふ事を志すも之を黜る何んぞ
 水号は後見して名日吾自あて未あり
 然人勤業おて不白も百列なり拙と
 もあては不白いきて出する白なきは
 書とて今一妻ありとては但是とて
 子我んはけては由はぬ世東氏久く
 居を下る地おれへ孤居也をうたぬは求
 りるより其方子但せ席も素新は讓はれ
 潤もせ下は居さうりう後今及去芳
 才殊ホウ生玉の伊斐は撥多きの恨ると澄
 一衣は後特選のとせむと撥をつれと彼地そ

セア
セ
一



集加るにあつては集の挿拾を考へんれを
ん乃れゆへも多し然も一筋の集は終
るれ何ぞとありしるゆへもあし然也
とありし集うへるわ

爰も何文の徳之下は奉るおをよつる
とく然存の法圃歴考支考内後又去
束文州の様をいあれ徳の考束あり
史所の志宜くあしるべき事意あり
とる人の後集加るにあつては
ぬるの指しをいしるす然も徳は骨の
結文よりある考束の口よりあぬ徳を
拾芭蕉法の明和乙丙の年肥後の文曉
中傍外尾氏より云々のちとと文論を
享和壬戌の及上様きとて芭蕉法と
号る由跋よりし孰考るよえ保士一乃
去去束中傍よりし一様録後の中も

表合三抄の序は許支考をありし
文あり其一筋の後集を徳を
あき由何即録は徳を引て
以後と考合するよとれ亦七
門下は支考をぬむ考あり
徳で云世にありし考ありて
轉傳の後様せりある事あり

冊子附日お似るる白い集は出付
て終くせざるより後集の
印本ハハむ 猿轡うそのむと
ととたり

月の部

北尾 十之六の口はるる月の部
つよよいの月の部もそのむ 猿轡
▲コハ箱列をちよきしつあはけり
部よりわらわはるる考るよ
と見えより本句も猿轡を
あつて

さういふ時代同用の語をあれと詮するに後
儀の撰りて後人何そも處を争つるや

裁人不猫控は云作て続符を裁りる答

則是等續符より予儀云の二字に天下の
法及て不猫控一部の實文亦と於續符の
江戸の字生估圃を撰者て又人云儀
の付假人之估本に定生おせり
方通名を夫猶いけさくこら
云表の大方と申集いえ存する秋いふの在
禁尾をいせより先所の枝葉あるを符
て七八両月の月付家撰て又子細あり
符より實之細き炭儀の字を補て和
符二代の法も經みて凡丈の凡ふ中
又及にさるを依云の抄入て折然の字に
あさむいむ符とあさむを考ぬ故に仕を
しるおし不猫控
文とつるの育の控は思ぬた
とて此所の實加は云よそめ

は某の御滅後は再法も思われと去来文
州を有なりと草符の假子板り志れい出
て消るるあり傍に出入るるありあり
時文に板りや一井符をも標をも今云
るより京傳より大印のりあれたる符
て和符と先所へ依云の字は昔は和の白和
しと備符と去来符吉の狭い者め

享保十之申正月 汲部白和

因何九日續符を法と云吉也和和と密
撰の字は威後の句と何といふは種きぬ草
へもあり年の考は句版子炭儀と出くる
を再入せしむと考むらん何とく又符に
の實を細くと云死おねの故と云符との
てそ和符の能悩して花実全備符の
和泉艦は一ア子止れり炭儀の考を補ふ
と和文育の云和之和法をそて和の和

さき中戻候より止る事と云おかしとおまわす
世高きもの事と云はれ侍は侍てし

白根うあをい載人う後更を懐く美申の
刀もておとおけけ加ま残人口を閉て再能
七寸何丸い又文の志実を考す寸傍固ま
只法はあまを荒てかく侍らむ強特
を法むと云ふは侍六那子替りはれ舌
長くとも懐きむ滅後の事と云改の事
芭蕉後の侍文子或り尻をこそのあまは
うり句再入の事い仇世の徳其及侍壽の
法其まも侍多うれと定ま御入の句を
再入せし侍はあり

大年や御子儀のさき高し 万早
早布 袴足ぬ御入もあう年の事 李由
年の市世さうむお織成 キ角
はお織成と云世高の事い只一白入ては

さき御子の句は御入と云あり袴きぬは
お織と侍の御上親下のおは御入の句
を求て入しは御おのお力之侍云は御法
は侍を述る侍れとる年束の人化は又さ
て着ても志き何丸も一固の位志も大
凌の因より再生てはせよあま始て仇
社よ至て後世の字跡とありむさを侍ら
実御儀の志は只文章のあやうく彼
は志実あり侍侍らめむ御儀の實と
いそむも御侍ちて侍衆二其乃中
るの一風侍といふは侍るは一御子あ
るの志は御侍るは芭蕉後志は侍る
を僕ちも御侍九丈の目よ又くは或い
首長弱の白和せよは侍るの志は侍る
旅丁の御侍あれはく人いぬを止て侍を
る一さとして由あり侍るは侍る侍の社

りきあひむとせられぬ日天仏のあてうて
かる松を足並たるとせられきなり
柳のと仰て梢のこるまきうり柳の上
を降ゆるあめりきさあけ八九五七の
宙空もくもくあけおちおちと松の言
きものを身りりいし柳の中は隠むも枝ま
は隠れたたきあも揺目もぬあててくぬ
振くるあせ八九五とつて柳のあせらあむむ
う又あはす材の根とえあてあ目乃乃根
いナマもあむい何きともよ

○**葉** 柳糸の風はあひきくぬ松八九五も
まそよよああやうしは九の老ゆのあてて
まきを九天とよとく柳の静あ松を八九
乃あやうまをいす松はは松のあをま
あはれあよあの松は哉の正文をまぬあて
ははれ柳は付寸八九五まてああうあア

まき柳はんごくまは松作を降て哉ト
あ格くれて松は南はト作はう哉ト
静く時ト上は松作をの静あてて作周
を草屋八九間榆柳後後簷は松
の遠松松は八九五まてあは天地の連
あは八九五あてあてあて白髪三千
丈と仰て代わを同まを付は松

○ **葉** 乃 松は白田あるあ年 沾圃
あ白門の松は八九五あは松年とらうあ
松てあてあて一乃とあてあひく作ト是田
家の松を付くまの松の松を声トあ
の降あは松あまの松吹下寸風は傍
一松は友略てあ松村長あての門ああむ
△松はあてあてあ合むりき松松作
松はあてあて松ト号くり ○ **葉** 松もてあ白
を松れああき松く

月下は二おむ殊月の光景は其の位也

□ 孫が泣くも 祖父の借付 其

▲あるまふ村に今も風は吹れぬと昔は是
佐田畑にケ稻と刃常接の作と見え家督
の孫に付たり孫が泣くも祖父の借付は是
子矢し志ふ村ぢの借付やう準ふ様と
初月定ぬるも今も風の風は借付して持余
くろを親親きて一家の孫はお積定は
る孫の団ぢの借付あれといふる孫を至
るも村に孫よがとそりそ車のおお守り

■ 孫が泣くも 祖父の借付 其

▲ある孫が泣く借付といふれ自由もや
り守りは村と見えをわをけたり孫が泣く
てあり孫の刀に村長の内ぢむ命家乃
伯又きて南をうぬ孫刀とてくきぬら
とお後するといや加かてるせも入用の

おあれはれき今も孫はあは其方り
おま棚の代は半これ借付あるお家
をかきつてい先きとくも親又あも所ぬ
そとむくの孫おのめ守孫の送付は○固人
まもいさるもは 圍ぢりやをいさる孫の
推し指え也 皆人遠と

□ 煤を仕まくもは名候の辰 占

▲ある孫が泣くも我孫刀と替らる作ト
又とたお斤付る用をけたり煤を仕まく
へも名候の辰ハ家家のす孫手傳より
て刀をの持指見ておちの孫をきこれ
孫刀いりてと正月さの孫指古らぬ
お多きああこのと替らたくと吐け持
あら斤付又孫指の用えする孫の固
初月をき孫を迷て孫指おき意ははし

■ 約束の小舎一控妻も来て 其

▲あるものは歎辞煤掃麻て候後不
は初ま直竹他の子と付たり煤掃子候
たくい食好の床極たまで進りし程
の眺おこるる自小考えあ何日は持束
と約やを多財な等て一握持束れや
く待あつてきむりてきよの腹はせ
むと振るる程と余とて候と又を
あよ今や食おを付る定法也

■ 十空をうりの余は出たり
▲ある約束の小考一握束束束でコレトエ
カハ又作てえ直用しき用を付たり十空
をうりの余は出たりと独居の小考人
之さりと那う小考おれて持人よ眺
を思をあく持束れい今う持たり毛
手はらおかえて又好後持束束と約
束て返す程と固快と不快は持束束は

■ 世は持束束小強にて面白き
▲ある世のそよほる小強を面白く時人の
家よええ又坊の指を付たり天宮うのあと
門の虫付ハ階低き志をう門の内は草の
戸結くる竹林中の隠者之朋友よせき
おとえてまの心をう固蒙承前漢蔣
謝舎中竹下圃三逕唯故人求仲羊
仲従之遊は傍を合はる○國國影竹
志をう合て通れぬ持束束面白と
隠者とて門低き志を付たりハ散之系
よほむハ志をう中あす

□ あこやうのあと門の虫付 箱
▲ある世のそよほる小強を面白く時人の
家よええ又坊の指を付たり天宮うのあと
門の虫付ハ階低き志をう門の内は草の
戸結くる竹林中の隠者之朋友よせき
おとえてまの心をう固蒙承前漢蔣
謝舎中竹下圃三逕唯故人求仲羊
仲従之遊は傍を合はる○國國影竹
志をう合て通れぬ持束束面白と
隠者とて門低き志を付たりハ散之系
よほむハ志をう中あす

似てむと吐くは固執出の挿指
轉手立合の月を風色を象ふ作はよし
○園圃京上の乃連すて取は打たるおひ
きは收口して定いを好む守

○ 又さうは挿ふ初のとえに 占
案のおおの時型は出むの度なる作は立
更柿の用を付たり又さうは挿ふ初のとえに
老のお起よむの隠れ苗代お又よお月々
けは透る指之○固執むとて芽出を何ふ
其派之コハ侵種あり

○ 又さうは先落れり作を又 其
固執む又さうは挿ふ初のとえに口を又て其
人の仕合を吐く作は又さうは挿ふ初のとえに
さうさうは先落れり作を又さうは苗
代又さうは姓同士の出合は又さうは晩の世
をさうは推てあらうは挿ふ初のとえに作を又

とよ久のめてさうは先ア人うとさうで
あり熊市や寅内ふまは落れんとお突
て海を指之入て更柿の吐は趣向九は
孫語をまた決めさうは又さうは又さうは
の令のつる去仕人又さうは又さうは
作さうはけるは印録は又さうは

いせ乃下向は落れんとさうは
案のお先字方の用を指す作は又さうは
は対面の指を付たりいせの下向は落れ
りとあひつるも案借より南をさうは
いう節と同き指さるるは一色やうて
作を又さうはれさうは又さうは又さうは
せりと吐く指の逆は又さうは又さうは

○ 長持は小傘仲るめさうは 占
案のお伊やの下向は例幣使は大名の落れ
とさうは又さうは更柿の指を付たり長持は

小峯仲乃のそつくと六車海面上の大久
の係船中下向と定てたせう浪山は常
より先着のちおの園辺にそり合勢に
通るらそそつき發して傍よりけある指
は作匠をそそ發せしむこれい愛の全致
の光をそそ加敷ナトすあゝ○固女子連
とてそそつくとけりは收り

くさつりとの世の晴る青雲 菫
葉白長柄よ小峯のそつとく軽きとと
らむと幸ふ体ト又まゝ方とる指をけり
りくつりとの世の晴る青雲トよ何お峯
飲る同為捕役人のモウおらぬそ何ぞ
そそくちめぬと比り守指の固体用
の妻こそは余情とつり只收り
□ 禪ちよ一日お砂の上り
まあるとつりとの世のそろくニ指テ大惜ノ青

雨まを体ト又まは指の指をけり禪ち
よ一日お砂の上ト八固蓮池の辺にそそ
くは文の友あつて世をそそあれ器
とて悟たの体又也

■ けやきの角をそそぬ費穴 菫
まあるお字砂の上より指役よま体する体
ト又まを指の指をけり指の角を
てぬ費穴ト八固蓮池トよりけり生皮田の
のそよりあつてあつて人いさな体せむと
は天ユともよそをちれてえそつとれと松
と遠そ指の尺角をれ一日そそ穴一
ツ果守るそ出で苦む指の固を指
はは○園指ヲ指ト指り指ハウキ

□ 侯出の年子儀をそそふ也 菫
まある何事も果ぬ費穴ありあつて世の葉を
教する体ト又まを指をそそぬ用をけり侯出

帽子は角之忌の尻口川の懸束のを擧
る初と又迄乃寺跡の振を付たり侍傍
まの望の振と振り上人を八束の侍を門
秀より解て侍傍の案内は進入の振△
様を改九く肩をま白くて又余を
まの固門秀の采と又て案内の侍はし
○陣内又ちの上人望より出る侍はあ

■ 控ぐやうよ長刀板の考は風
る侍傍の先きて大急又もく葬の侍
ト又又侍傍の振を付たりまおとて乃寺跡
のめぐり家あむつる焼坊の中山を振まを
白川の望家と又川流を南は中山とくま
後れはる侍傍の息をまくと皆は抜く
葬武坊の又もくおくたの方を長刀
板より切きぐとくき風吹嵐守は容を
乱て狼吹まるとくそくそくらの長刀防ら

と付よれてきうむ振△長刀板の悪谷と
まめ聖山の境まや聖より焼坊へのを乃
あれと儉狭くそ板の垣ぬぬは少口ぬい地
い後にも多人持あを古人能て振り
○固板のまは打おのてはは地をまぬぬ

■ まづくまは星のまをれくま 芝
▲赤白平急よりよきが(紙)る方の長刀板ト又
△又侍傍の祝を付たり 臉は星のまをれ
くれるよは治き暖の星新度沢の池は移
天地は星は南よりとくまをるま天もも体よ
日やくまは侍傍の細よりさか桂田の橋子様
櫃鞆をゆと載ある女の長刀板より池を
降るるまはあは星を載て出まアタマ
星を載て胸をあき人の刃をまはれと古
流を名出で憐む振△洛東洛西は日之あ
るまを分て志実まはれとくまは日之

あきくはあきく冬草よりうへり轉ずり或人
曰洛東の板より星はあれすや冬日早芳
て又せ刀板より條むよ東は文字山麻
谷山より早て臉は星をもつ形容は古人
の枕社跡ありすとられい友人の毛を録
ちまきて然んゆり

■ 引立てむりは箱きたるやき 箱
固まる臉は星のたをれするごとく愁を會む
嬌態ト又ち圍人よ條ぬ用をけり引立
てむりは箱きたるやきよ大板のゆあよ
百見さきと節れとえよち出くもあ
らぬ男あけい候はむきいころを大お怒て子
でうるう我あそくかくる吾む誰あるおれ引
立て箱せよとあきよりわく立てまき姿の
けなをやくある友人の箱より彼は星の祇
玉は佩せられおの録は箱より伏せり

□ 井んと大人は屋守は 和 佔
あき引立てむりは箱きたるやきよ
又ち拙文字をけりそんと大人は屋守
燈およいうしてあいむとんを痛く風
情哀しく行後さき人よ勒るはアの
おあきるや ○固まる人共惚也

□ 花のをもや強ぬまよ只まきり 夏
あき大人は屋守で字を楽む雅人ト又ち窓
あきの跡をけり花のをもや強ぬまよ只まき
てはまき守山よをれ上より眺て後よ
るる月日い多かれとむ又てくまきまきそ
あきは古身を思出て秋方のあき方と
あき強く固まめやあき強ぬまよ

□ 俄改のあき 陽を乃あきり
あき花の梅を嵐山のまきよ又ち大お川
をけりて改ゆる陽をの氷よあき潮流

際の事をば是るるを母の守は子供集
てさし喰する振之〇固卑候の振作用の
変共あり又換の位にん

■ 茲をきて外乃使はり
業白おけ字相の云お去換居て之件
ト又直まはれ子の用を付たり茲をきて
おの使はり相踏あるきて泥まわれは本
なる子を茲の上は抱上げて比く是使てや
振之〇固赤い合多中の爲めあれ取く用也と
又定て奪身一なりは去種の業も或は是

□ 悔まらり乃一歩の又換 克
業白振ニ茲をきて外の使はり是ル男と
又直市度を行たりコハ市立の小若人の
女房は是の切持出たりはもはりやと
是れいやは何賣おのそむは終ま一歩一ソ
元換悔れとは方さきうであんとはを

分よりんこのよと吐す振之△茲くは是は一
アの換と云なり固市は是は是

□ 請快すんで存云ふりする 占
業白一ア又換て悔む店到ぬ小老ト又
直お業の振を行たり又伏候て存云ふり
するよは日な云又伏持束る在玉の物より
よのこを治りてはれぬが却て自の毒ありを
親方へ使きてとねまねむ田舎老の正
直なる振之〇固悔む人ト下女の業も及
てなき方自他の妻共は挿る

よまてくる本業の天の氣もまはれり
△はるよまてくる業業の天の氣をてトアス
家別て存する振の運付のやういとあれは
是はト作はり一向行ぬいとぬなりコナリを
てト直りてはれ行なりは合伴度と業
の存人ト又ては変化せぬなりはぬえり

よりさういふ文状あつて、行附も執ぬ、廊
生ト團ト又立折者如斯夫不舍昼
夜古語を俗語に扱ひ、詞を合て「まゝお
せう」といふ家の所行よ、まゝ愛おせ、まの
るも一日くと、忘てんよ、ほさく、うま、執も今
へ到て、なす、つ、扱と、か、ま、む

■ あゝ、ふり、し、くる、固、方、社、客、 莫

素向ヤノ主ノよちて、る、素、お、の、天、地
の、地、は、た、と、又、立、折、意、を、行、く、る、あ、る、扱
考井ル、玉、方、の、定、目、人、始、て、束、く、る、船、政、の、古
奈、並、く、賞、積、り、大、後、中、の、世、事、に、執、く、出
く、又、積、ま、く、れ、と、執、む、を、ア、扱、よ、う、を
後、よ、束、て、借、む、と、下、ん、あ、む、と、乞、を、世
て、素、乃、く、素、お、の、詞、も、て、自、を、守、る、扱、く、固
初、会、く、く、又、る、子、扱、と、あ、ふ、く、る、ん、共、は、し

□ 何、も、も、あ、く、て、め、く、く、扱、定、 占

素向何の扱、る、ハカリ、玉、方、の、素、ト、執、人、ノ、世
と、又、立、折、次、の、詞、を、行、く、何、も、も、あ、く、て
め、く、く、扱、定、ト、あ、く、速、扱、引、の、際、亦、く
扱、一、扱、詞、は、准、て、甲、斐、佐、佐、の、客、店、に、あ、る、扱
一、も、一、向、折、ま、ぬ、あ、ま、さ、く、く、を、う、て、何
も、も、あ、く、て、め、く、く、と、世、の、ま、た、又、扱、と、扱
手、出、す、扱、と、固、玉、方、と、く、ま、素、向、と、又、て
行、く、共、凡、ト、

□ 風、は、た、ま、く、る、ワ、セ、の、松、社、月、 行

素向二百十日、何、も、も、あ、く、て、通、テ、め、く、く、
き、扱、定、ト、又、立、折、次、の、扱、を、行、く、風、ま
た、す、る、ワ、セ、の、あ、る、月、ト、八、月、上、旬、に、扱、引
の、困、り、後、そ、の、二、百、十、日、ち、や、れ、と、ま、ま
と、吹、ぬ、あ、ま、忘、て、お、く、り、失、く、何、も、も、あ、く、て
め、く、く、と、ワ、セ、扱、く、る、み、の、辺、の、村、民、の、素、向
扱、と、扱、地、ハ、ワ、セ、八、月、ノ、中、ニ、九、お、あ、る、七、月

比之固困一後共れす

■ 甚に秋の位ひは住うて 芝
▲ 翁も風よたすけし指きよき川表布よれ入る
件よえき家内を居し指せたりきよは秋
の位は住うて六孝の小内をせとする内
あむ川入あそそをよ上て甚よおろく
くる指を尺指及のぶあむむ

□ 彦改の息子女房ゆり 占

▲ 翁も甚よ秋の月さき指きよく弘あくる
件よえき嫁れをけりけりけり及の息子女
房ゆりよ上公指びを備云空一息子女
れりり我尾のむのん移りよ秋
と住きよるりけりけり ○ 固る指よある
ん共指れん

■ 昭もついで幸阿の事新 り

▲ 翁も社及の子れま指連をえて住い女房

▲ 翁も上女子件とえきま指まき及き用を
けりり昭もついで幸阿の事新よ上大
勢年事新まりこれも固る人及の志れさ
りしを昭もあれて又指まきと指てきりま
子供ぢやと名そのあこよまやかくのてうア
人の長するま指ても我力の老を教りくと
名や指て△志郡矣也村小加良阿阿社
稚女日命とやて天恩を神の御妹と
り社地はあそそ松林松系之女房
女指を教向一昭果る鳥と住きをけり
るをり指へり固り

■ 世衰を去りこの口うぬ一後 芝

▲ 翁も年事新昭果て各指の件よえき及
世を行り年々事新よ也くく世乃
親又く所及の志新定をれとこのラ
用きりる時方を度き休む時尻く

又て程客の風無すの極也。固も影隠す干
くも伴舞の字は志せりはは並おこ

■ 志おぬ合点で想うてあり 沾
▲ 兼も号めたるけきを掃掃するは掃もく
いふとま伴ト又志を感せたり志子
ぬ合点で想うてありトハりちと快りれと
と号れらるをばまんは掃除も東あると
皆弄りれ先死ぬ後ま今あを定てこと
おろすに招く固快き日はよ

■ 年こは家うちのおと中あり じり
固死ぬぞんて想うてあり横志志は詞と又志
かり人清の招せたりはり年こは家うちのお
志と中ありト又志一教方命の人あむ振中
喜うおろも志修りて家の子まう陰には情め
て其をともとや困るも信と懐く招く

□ 三崎の敷架の荷れおむ也 光

固あむ年こは家子と中ありあむ出代志
らぬ兼み教又ト又志▲ 偏座の招せたり
三崎敷架の荷れおむ也トハりお合舞ら
海はの舟向及ん載お荷おの空くるを船
取の積は束とと彼は扉お志けりお志のと
斤文とてやぬを弁の年代うんは修よ
漢いりも志あむとらと只又ておる招く

■ 計の實は志まるかの出せと 沾
▲ 兼も号めたるけきも志多く東ある伴ト又
志志知志を付たり計の實は志まるコロカ
の出感してトハりるうお客まうけはは青
おもあく困るをモウおら出感してはは赤ぢ
やと志切あむ他子招く○固はあむへき財
そらそ向志の伴ト一返りおら荷おむ守
○ 兼も志志を先州てとらり

▲ 兼も志切あむモウ計の實は山は初と又志

□ 札入て秋はあけりきるの月 占

▲ある夜は初夜と云う荒日用の夕服着て
体上又立行義直るる指さ付たり札入て秋
はあけりきるの月六日中裸と云う飾り時下
司の穀いりりも六月といひむ用仕じり
夕服さしてゆきと云うされまひ地まといひ
各札入豊るるさま人の入てさうちや札入て
秋はあけりきるの月○固札志と云う

● 秋はあけりきるの月

▲ある夕暮は使仕とて札入て体上又立行義
の出さき指さ付たり△は白秋はあけりきる
は付りきるの月札入て極き秋暮は
あけりきるの月△は白秋はあけりきる
雨の袖上は袖あけぬ秋日和舟人の
羨とる余情ありむ

■ 秋はあけりきるの月乃は吊て 占

▲ある玉置夜はあけりきるの月をさしあけ
体上又立行義直るる指さ付たり△は白秋は
は付りきるの月△は白秋はあけりきるの月
あて思ひを又と云うの産の母は産て世は
便なき分と成独さあけ教る指の足付
固まきまはあけり

■ 有付てゆく出相の庄内 占

▲あるは合意のいとまかたう実の母乃は吊て
は白と云う而後の用を付たり△は白秋は
は付りきるの月△は白秋はあけりきるの月
人を求て出相は起り玉を指しは仕て
再見はと云うまきまはあけりきるの月
と云うまきまはあけりきるの月
去後りは出人あけりきるの月
去士はあけり

□ 秋の志はあけりきるの月 占

その風を那をのね風ともあつむ

■ 冬乃まさ木のまねあつとく 占
希白風ときお山隈をたゆく件ト又
栴のりきを信よりそのまき木のまねあつとく
ふハおまねあつとく山の松をたたくまき
もまねあつとく松より信より風はまねあ
松まのまねあつとく信よりまねあつとく
引居る鷹をよのまねあつとく固草枯
鷹眼疾とつ風信は凡より

□ 大根の育ちぬ去り言されて 翁
まの正木のまねあつとくまねあつとく
ろきめえのまねあつとく又立畑はるまねあつとく大根
の育ちぬ去り言されてよ小ぶりの畑作せ
まねあつとく又立畑はるまねあつとく大根を
めえるとまねあつとく又立畑はるまねあつとく
○固天根引はぬ之國國海は正風のまねあつとく

栴之まねあつとくするよ初を信は移し

■ かし下ともはお茶のむ秋 三
まの大根の育ちぬ去り言されてまねあつとく
件ト又立畑はるまねあつとく上下ともは
テスお茶のむお茶のむ村まねあつとく上
のまねあつとく又立畑はるまねあつとく
くても大根のまねあつとく下男まねあつとく
招りあつとく又立畑はるまねあつとく
うするまねあつとく又立畑はるまねあつとく
○固え入る件はまねあつとく

□ 町限は月又乃頭の家賃 占
まの町の上下をまねあつとく又立畑はるまねあつとく
茶を信よりまねあつとく又立畑はるまねあつとく
より町まねあつとく又立畑はるまねあつとく
月竹溝のまねあつとく又立畑はるまねあつとく
まねあつとく又立畑はるまねあつとく

既チ此ト後ナリ

■ 荷がちりくと通る事次
り
余の町内費はありく人の子供上之を
子物ての事をせり荷がちりくと通る事
次ハ勢勢下よる除おそむ向り又出む
とするよる末まむ待合て候きり持明ぬ
扱はら五りの子も連くるとん也

□ 如恩院の如く此等極りて 芝
▲ 余の箇夜の通る事人て其まのさとする
件上之更何せたり如恩院の代乃候
極て十八日同りの仕ありむ荷がちりくと通
するモウをるよま返一ありとまの扱の送けり
○ 固二白二念共並おん

□ 扱乃後ハ窮尉木もやく 占
▲ 余の如恩院一治て代の候きく件上之更
扱の後更せたり扱の後ハ更で更やくよ

門前の橋の事扱る所のむねく代の候きく
乃理で先大傍止の扱ちり後の大傍止の扱
でうもやくと候する候之○ 固門前の事共二扱
くさる事候の仕あり

■ 扱板此懸はあをる候一 り
固あ白扱の後ハ更と引続に季の腕懸ぬ
池室ト又立形控茶庭をけり片 扱板
の懸は水とを流よるも摩き此泉は後
扱衣の斤射まふり候之

□ 目利で家いんくしあり 芝
▲ 余の如く水約て懸度ふを極扱まふる
件上之更何の字も異なる候と未たり目利
て家いんくし扱りト古たくの目利勝之
系もまふり人の志あり世候るのと家
まふり字を載て出入する力とら費更は
失更之こと思はせりやむ扱之

■ 状紙と後河の花拵交れて 估

▲ 何所ノ角三目利て赤いよふしちやト赤葉
詞とえ立おれむ拵を分り状紙と後河の
花拵交れてよ後河花拵の便よ江戸の目
利河の内一状紙守拵よまご定花拵乃
よくまぬいよはの秋目利赤あむむ固目
利お入るり共ト

○ まごせつらふあぬ日乃新 り

▲ 赤白状紙交れて雁之の件ト又立更防の
咄と分りませつらふあぬ日の新ト後河
より盤々束人あぬ口口を運出口拵を
又てまごせつらふあぬ日乃新ト拵を

○ 赤の葉よ窓の水拵はちきり 芝

▲ 赤白ませつらふあぬ日乃新ト拵の始て
又赤白拵ト又立更防を分り草のよまご
せつらふあぬ日乃新ト拵の始て

せつらふあぬ日乃新ト拵の始て
赤白拵ト又立更防を分り草のよまご
せつらふあぬ日乃新ト拵の始て

■ 生約をきり子孫とりのる 估

▲ 赤白草のよ窓の葉よ後河の柳の海水ト又立
更防の用を分り生約をきり子孫とりのるトハ
ア生約は厚きよ八月の鶯あつて赤
白もあぬ今もあぬ赤白むと拵の赤き
拵ト又立更防を分りせつらふあぬ日乃新ト
拵ト又立更防のよ窓の葉よ後河の柳の海水ト
又立更防の用を分り生約をきり子孫とりのるトハ
山をるのよ窓の葉よ後河の柳の海水ト又立
更防の用を分り生約をきり子孫とりのるトハ

■ うき接い拵と連るるはきり り

▲ 赤白生約者て拵え財あるよ候よ赤白
拵ト又立更防のよ窓の葉よ後河の柳の海水ト
又立更防の用を分り生約をきり子孫とりのるトハ
山をるのよ窓の葉よ後河の柳の海水ト又立
更防の用を分り生約をきり子孫とりのるトハ

加万の名残を肴とて生酌のるやを
ては比の務村を秋出の後の母人の苦言
あつた了とほる小者の徳は遠くゆく
候もぬ秋もゆと候もるあす風情
固人者人の身はほる女はれう

● 五郎三郎の明もつる空 其

まの白小者のほる実系ト又立おりきを
けり△む村の後ト実系ト又立実法を
まのことうき接ヲ付浅りう実の徳の小
をを近平ト又立□目も厚くあは彼の
上ト是き深あをさく

□ 舟舟の花社中よりはんと出 占

あつた明もつるまのこト又立又人を付
うは舟舟のむ社中よりはんと出てト市
坊出の舟舟の候候くむの各度出ると又
て市立の子親と又よ振と

□ 柳のむを之門三をちりり

あつた白木つむ舟のむは荷上セト又立
又木の用をけり柳の傍は門ちる子
りト川流を渡之川上より舟舟木を
束て極結は丸を柱立て門りきりす
るとして川辺の自在を思ふ振と○へト
せりてん況をさあはるトト去あをさ
るありト改とさるもままト風景を
るむ後うまは○固三の二重はあ

■ 百姓は年て世もも世も

あつた白柳の傍は門ちるい好は但す他位と
と極遠人をけりる姓は年てさるも
年さまトト五柳先生は田舎を居の振と
あつた東辞園日涉以成趣門雖設常關
策杖老以流憩時矯首而遊觀雲無
心以出岫鳥倦飛而知還ト世もも

采さきとんの侍は門外を遊むする招く
固五柳の侍はさき

□ ぶすめを招きあめ斤菜 沾

采の百姓は成て世の夜もきかたうせん長
采さよとたとんを客もつをを付する去
中めを招きあめ斤菜よん痛ぬ友来
くろよ采漬出で指はまおつ時かかるお
い自も又向さじをんさう百姓は集て家
あても屏菜をぬすくあ楽ふおと突
吐す。招く。固件用と一規之

○ 煮たの志ふ紙包おろし並り

采の斤菜は中のは飯おとんを接人の
招き付する煮たの志ふ紙包下店
店には腰をてく招く固志人高き
○ 煮漬おと漬う系を煮上ル草を中
漬し欠るるあす

● りふ乃異いそよりそやぬ 免

古ある志ふ紙包下るを乃の木張とんを
招き付するりふの異いそよりそやぬ上極の
張はるを乃は両乳投て汗拭く涼風去
ひく枝打眺る招く

● 砂さきとん棘の中は路線の声 沾

采の白河名の草初め日感下んをさき乃
さきを付するさきとん草はよくをあ
暖い風浮る海上とんを「浪むとんを
の飛舟舟上へ異いさきとんをさき
○ 系と棘上後 七七後 聲と後

■ おを人うを出せをあく り

七七後 採日あつ砂をちを棘のきすすお辺の
系系上とんを秋愁の情を付する
あけはさきの系系上とんを女房の路
おろし巴くを系系上とんを人の出合をさき

悔しのワット^⑧は出守をえてアけはら志は
む教を親く挨拶^⑨とくおてうき涙を
涙をりかくと志る^⑩教をききおとと哀
くむ指^⑪の固郊外まおを憐む女はお連之
郊外のおらちる姿おれい砂のきすまうに
□ 大権の大活て務手を辞すも 竟

あふ夕と立るおと人ういとまを云出せり子
あく件と立て女権の指をけり大権の大
活て務手を辞すもト下女呼て勇乃
大権活さ毛モウ惟も来まん坊よ指く
せむ皆も休てあきさく起て指せま
ひ連て勇乃く指く○^⑫正秀乃曰
熱の坊まう之風情を厭す之親教知る
の心をけりる指は位也之世は指を指くお
とあくしけらぬよ死おとあれと只おまあくは
ハ分袖之指は^⑬大権活のい子を指する指指

自休する疾起るんあを何あま或りむ
直意あを指まうりき^⑭件は指象之^⑮一
孕さる指手を辞すもト下ハさもあむ

□ 一不ふくくか^⑯白乃示 沾
あふ人ス^⑰大権の大^⑱三毛活て務手を辞
ら毛は^⑲と又立独佛く家の子をけり一
端^⑳雅の示よおとけりて一毛の毛は示
志け指仕は^㉑まうて^㉒ア妻指連の示おな
ふ人ぢや^㉓活さ言^㉔季まよう起て吐おくと
難^㉕活ては^㉖休する指の運^㉗け之○^㉘正
秀乃曰あをせ活とえて^㉙女人の情もて一毛の
示よ^㉚居る身^㉛体は^㉜指象之^㉝止^㉞秀乃直秀
あふ^㉟何あさる^㊱姿あきさく^㊲りむ

□ おく^㊳実目の起る^㊴天氣合 り
あふ^㊵るま^㊶一毛端^㊷後^㊸方^㊹後^㊺悔の件又立
お^㊻指^㊼を^㊽け^㊾り^㊿お[㋀]く[㋁]は[㋂]実目の起る[㋃]天氣合

チャニハ田草えり実目しおく起て難女
すゝとけりうく強く足踏のちとあさし
よよむしく日和あれ服初は荒働を
悪心とあつゝあつゝして又仕換へ今度
もにち休むと悔の指し〇をハよト改じ
固自他の変は極多と

〇 仙よからむの遠くおきき 莫
あちおろは実目の起るヤウニ空う又天を
合は初とん直ねれをせう仙よからむの
事をおききトハけりきい思ふとどうとよ
持あのおいませすとよ指し〇固三百三意
あさ日私のものトえきしし

〇 月影は正に世を吸てえり 占
あち極よ吐おておききとえりし件トえ五月
よ昔すゝ指せけり△相草いおききとえり
の付そ二るの信新を愛いからむ事とえり

異地よりき地よるる件ト固まて五月
すめえ俗衣おうき湯飯トあさし

■ 心のはらよけでる根あけり
あち月影は長すいん落るし件トえ五月
用候し指せけり△心のはらよけでる根
あさトハそさし掃上きれんはかておけ
くんと手作草はえり廻する所の楽情
之〇^東ふぐトハハ 茨屋連あむむく次
在あれあ後はけき

□ 手拂は娘をやつて娘のきき 莫
あち五家アテ心のはらよけまきりけき
陰根茨屋初とん直女家の噂をけり
あち娘は娘をやつて娘のききトハ二人も
あち娘は斤付島子よ娘らると大
か家作よりア内もほくまじく成さ
と乃通の噂する指し〇固心のはらよけ

よき心自他遠く

■ 桑宮の流をさちで仕立る 沾

▲あるさくま子松は娘出されぬうは
咄と又直女坊の用をせたりコハ娘多
内おれ村の美志の抱きて常よ人の
強おはまらむ鳥子の友を此扱業ま
て支度おれぬ桑宮の流をさちて仕立
と隣のかくま子傳れて常持まおと強
さちよも嫁おきては所すは部付あ
と咄す始く

□ 花の後さくじの方向面白ん り

▲ある桑宮の流を仕立て出を伴ト又直
り後の噂をせたり花の後さくじの方
面白んよもや吉おもちうはあま
流すのほじうさく又むよりも一入面白
とさ途おる抱く会あり桑宮の流あき

よまそ又人の流をさくり○固打あての
活は悦び

□ ち乃ひける山際のま 克

▲あるむ山の林下はほじ極る築屋眺て
女初ト又直お流をせたりちの引テア
山際のまトハは迎えようむ又極るを旅
一はれ他よりち引来てを産を依て
は娘き地とほはは入佛供書おと始
くる抱く会おのほじうさくあれい家まをむ
の流をさくり○固打おあり昔おき
風さくは後白成く

□ 文よりむわく十四池のき 沾

▲あるちのヨソへ引くる山際のまト又直お
換し指をせたりあまよりむわくあれ他
る人ちおし村の山際の他も教生林
あれいさく多く集るをさくのあち引

おのふんはる様うねろのたげもは身
を括りし

■ 日をもきりきと洋多岡 箱
赤白まねの松ろチ松ろのおりきよんま
坊の件を付たり日をもきりきと括りし
まきりきと括りし加あしきりきと括りし
まきりきと括りし松山は松ろ拾ふ
姿をこれとまきりきと括りし固松林道
はし○陣直布のまきりきと括りし
松ろのまきりきと括りし
まきりきと括りし

□ 水個る池の中よりたけりて 支考
まお白他アル日をもきりきと括りし
まきりきと括りし水個る池の
中よりユク乃おて八山田の用水池の
後れの中をまきりきと括りし

解スものをば方より脱て又実室を
括り○固ま下のまきりきと括りし

■ 藤竹やまはまきりきと括りし
まきりきと括りし他の中より脱へた
白と又まきりきと括りし志の竹
まきりきと括りし他の中より脱へた
まきりきと括りし
他の中より脱へた
まきりきと括りし

● 鷲うあつとちてまきりきと括りし
まきりきと括りし市は松ろまきりきと括りし
まきりきと括りし改りし
まきりきと括りし
まきりきと括りし
まきりきと括りし
まきりきと括りし

もよく美し一為賞する男の今をいふは
て華は色一とせばも移出して多ねも止る
んは御あはれありもいふとけりしは情布
のよさをいふの挿入也

□ 舟を来て人もせずお語 考
美をよねむとすも眠む悪て死ぬる件ト
又さ妻来せたりし舟を来て人もせずは
お語トすは尺角ある舟のり義は御侍
仕所一親父の因果されと吐きされい余文
あくおたすおと固欠情をきくはよし

■ 中玉よりお状の吉たた 然
美を舟より船をよ来てお語する件ト又さ振
りの指をけりし中玉よりお状の吉たたトハ
中玉よりお大なる大祿は百抱もと中
束る指の吐ありむ

□ 朝日の日いさきや振じき 翁

美を中玉の鳴りて葉する西の吉たた告
束る件ト又さ状又る指をけりし中玉の鳴
葉する船の内之中玉船大風の鳴り九の
おとさおの状束りておとさおの
およりおをてささとささてりし
おとさお何とや振じれてりたりたり
度えも風挿入ありしと思合先おとさ
おとさおツイタキハ月立あれは日字をさす
は汲山炭俵初き上の便り方の内ノ付と同伴
之再用りしおとさお向えささるれり固難
船の鳴りありおの便りてたりておとさ
りりとつておとさおは○陣おとさおは
よとさおささる人とおとさお中玉より吉た
た束る件ト挿入也

□ 早お織り矢てたつぬ 考
美を朝日の日いさきや振じき二百ハイツコ

と扱すの件ト又立仕るを考る用を行く
部々と続く初駕午の夜多き扱は男
吹助を懐懐入る。子相識を以て之を
しむるさきものねはあつとて搜えて尋
きとまのさきとてい。奈くを異入る扱
之之の若後相識を尋して肩子を懐よ
してあくる夜入りまうけあふ部くより
目定振と続く時懐入て出さう出ぬる
ぬるもあむとてりて居る矢も
あまきうして其のさきとてい。守
● 子相識を以て此擬物象 扱
● 奈く只今相識を以て肩の件ト又立仕
● 子相識を以てり。いさふ事その比乃
み之で六月部後系回山の大会とわ
て遊まは踊る海をて子相識の扱を
断板下てあ。南考とて引返し居れと

えす後懐しとてさ近の樹木もて部く
こととふ扱之固乃急は并角と矢一後然
草の伐と変態のい。○園園相識の字遠之

□ 山は門あるお乃乃月 箱

● 奈く只今相識を以て肩の件ト又立仕
● 子相識を以てり。いさふ事その比乃
み之で六月部後系回山の大会とわ
て遊まは踊る海をて子相識の扱を
断板下てあ。南考とて引返し居れと
えす後懐しとてさ近の樹木もて部く
こととふ扱之固乃急は并角と矢一後然
草の伐と変態のい。○園園相識の字遠之
□ 山は門あるお乃乃月 箱
● 奈く只今相識を以て肩の件ト又立仕
● 子相識を以てり。いさふ事その比乃
み之で六月部後系回山の大会とわ
て遊まは踊る海をて子相識の扱を
断板下てあ。南考とて引返し居れと

● 初見相識人のくけまを考

▲秀白山は門あたる村ぢの宅ト又をむねの
の用をせしむ初嵐畑の人死に上る
妻のたむけと畑は粟稗植るるに嵐は
傷せし門より下男多く出死して妻
よりするを信り大衆こと乃通の眺る指
之固麻未本吹くしてむねは

□ 水際走る候に小綱 物

▲秀白初嵐白畑の人死他は信三死に上る
体ト又は信侯の用をせしむ水際走る候
のふ道ト候人の大綱引するを又て畑は
ある人の綱引も信て莫業をむと發ち我
信りお替もく指之大綱を地ちひく時
い夕時くて次男は多くこれい必地人の手
指之頼其形は莫ある中信侯のおも○
固綱怪は強ゆるははたを志ぬあり
○ 又て通る紀三井いむの候かり 箱

▲秀白小綱のお際走る候にむねのなはト
又は信の備をせしむ又て通る紀三井を
むの候よりト候もむさくは生の風を
を眺るく人の時言の候あり○固綱お言を
一は固と奪はぬ

□ 信持一人はいつく 永き日 考

▲秀白紀三井のむねとありあをせしむ
ト又は子達の指をせしむ信持一人はいつく
永き日ト候下より信代の方へ向ふの途に
五ツ六ツの子を連れてくる石を財はあり
りまをひく財は又石をせしむ一人はいつく
け子の信持するいあんどおとれおち
て紀三井を指しける指を

□ まち風の又西はあり北はあり 物

▲秀白信持入の信上は永日を費す体ト又は
信持入を行くまち風の又西はあり北はあり

ト雇人あき浦は舟忌て水主は荷上さき
るよお音の程風を彼方ばは人舟あを
舟者一人手は困て仲仕あきいけふふふと
滑く船を風あるあややおりり○固件
用の妻は付れ又おぬお

□ 我手て孫を大るやうく 病
ある程風は持てき熱往束する病ト金實
用を付たり我手て孫を大るやうくトハ
医師之手子呼て後葉洞合させりき
ぞうしりおぢやと少合する程と固定
ぬ梅柄はれよー○國方の上をゆくち
乃の風あくあよきや風邪はたきそ
やききと信む程は孫連て風引ら
引ぬら考ぬ位そい孫又ても言ふあむ

■ 後呼の内美は今度登あう 考
固あむはせせト我手は孫を大るやうくは

祠と又老の序名ちる指を付たり後呼の
内文は今度及ぬあうト次あうトよ美さ
女房はううう痛も熱う帯住あ手
下孫又て葉はひやううぐアく海あのおえ
りちいひぬおと隠さする指と

□ 嘘吐のささもむさとせられぬ 病
ある後呼の内文は今度及ぬあうト東レ
こがワレト祠と又老女次の行を付たり嘘
吐のささもむさとせられぬト是をことと
違ふぞア男わを室まきこれ嘘吐い
えよりささもあぬ皆用んせよと天
の嘘吐は強き山伏の裏正あむ

■ 大切お日る二日ある考の産 病
ある嘘吐のひんきもむさとせられぬト
又きくろる体ト又老女由を付たり大切
お日る二日ある考の産トハ主親の志目指

之ち門あきて盛むすはく通るるれを
くイキうけひひきけし我も惚れむ
と又あつて門内へ入る者おの指之
い盛むの信あれは實も盛むの深き
なり ○固盛む子之親の妻ありは固盛
母の意目之方の徳きてはむ父母志
と之信はモ皆極あり

□ 西播磨一申乃促道 考

会白二日申御所と申候との日を大切
御門之家の傍より上之信老の志を
けり申播磨一申の尻乃下事御乃
方之助もと及候一門あの人乃免
みぬ御傍之三月十日極月月次法
座之 ○固盛月の法会共尚守二日あり
申七益取と云々候す

東之社の事をい皆出衆候 控

会白西播磨一申乃促道 考
ある御上之信人を行き申東之社の事
をい皆出衆候一門あの人乃免
と上る者御傍之三月十日極月月次法
座之 ○固盛月の法会共尚守二日あり
申七益取と云々候す

□ 西播磨一申乃促道 考

固盛出衆多く事をも申東之社なり
上之信乃又申御所と申候との日を大切
御門之家の傍より上之信老の志を
けり申播磨一申の尻乃下事御乃
方之助もと及候一門あの人乃免
みぬ御傍之三月十日極月月次法
座之 ○固盛月の法会共尚守二日あり
申七益取と云々候す

西之社之事をい皆出衆候 考

会白西之社之事をい皆出衆候 考

用をたたりはよりか青のあき月又てよ
浦辺は泊る旅客を其傍の上は大溪よ
てあられい今うらなまをたす来より合ふ
あうあう^レ控の心する振之固居のあきと
やの程あつむいよ

□ 赤鷲改を危正 面 猶

余の青クヒ下戸に居よりもは子のあき月
又て出向と又ち又高の笑をたたり赤
鷲改を危の正面下戸の月又客の敷
去赤子辨るを又て信て各の標の尻
鷲改ちや居いあちう次て又すれあ青
を控出で来れよを危の鷲改持きし事
青あじと笑ふ振之固居店の挿振はハ
赤字あんとまぬあ

■ 定了ぬ娘のんえ志ん免 着

固居の正面^クハ何のむうと敷のま向は鷲

又て又する件と又ち性根危病人をたたり
定了ぬ娘のんえ志ん免をめし 志衣の思
ふ狂乱と節を衝し骨りをさあ正正ある
う減むと鷲改の神柱と正面はありてアハ
何のむうと向しぬ抱人のん死をたたり○
^{固居}只^{固居}娘の強まりんえ志ん免をたたり
は狂あて危の鷲改は向てあつむいハ挿振は
鷲改と乱心の事あす

■ 挿振乃とまらぬ方社愛 考

余の傍警目ニテ定了ぬ知千娘のんえ志ん免は
向と又ち又又事件をたたり挿振のとする
乃と方のまらぬ方社愛を挿振のつり
てぬまをりて挿振の功を衝つた方
行やとまらぬ方社愛を挿振のつり
振之○固居れ挿振又挿振速速にたれ
まらぬ方社愛

■ 名は松をけりりと執す松の風 松

葉の葉をて採行採るる体ト見え及を
受守方をけりり名を松をけりりと執す
松の風トお嵐ト朝の松風トと云て
松の向も松の葉も松の葉枝て執りる
昔の古の昔は目と見えく士の楽隠居

□ 大工を乃る契トす也 松

固ある名を松をて作れある大家ト見え及
込る松をけりり大工をの契トす也トハ
中入をす内ありむ見やる松

■ 采擲もりいふとて擲る也 考

▲ 采白葉の葉をて大工をり人の思ふ体ト
見え及ををけりり采擲もりいふとて
擲る也ト門口より采擲もりいふとて何と云り
又お擲もりいふと何と云くをてりり
限て采擲もりいふをりり用はれ

束のい何と云ふハア葉の葉を大工をり
このアアヤぢの小細工ぢや古時の人
テモ葉をいふをりいふとお見やる松
葉は用あり下擲も朝すハよりトは
はりりいと見え及ををてりり

■ かし方で市の中を押あふ 松

▲ 采白采擲も町人モりりト云ふとて擲る
はりり見え及ををけりり
男で市の中を押あふト町人ト解りて社系
まて押合の葉をりいふと押擲もりいふ
いふ地トと云いふお見やる松
をり果ると門は出て宮の方ト見え及を
相立て押あふ葉の中を擲る○擲るや
ん松ハはれをりりト見采擲のち市を
擲る松と見え及をりりいふお見やる松
よりり見え及をりりいふ

□ けあさるひんせいのけあて 物
 業の押合する暇ある時また是時俵
 賣ある柄をけあさるひんせいの物
 けあてしては秋まきといまは比布子
 るよけあてといふ二月より三月の
 解揚を
 けあてまきまの人の暇をそそぐ物
 ○天
 雲の市へけあてるともいれてけあ
 物ある大和の上市は二枚はけあ
 るにき障のあさすする所のけあ

■ 危の油乃まきぬらぬま夫 考
 業白けあてりまきぬらぬまのけあて
 記とてまきぬらぬまの油のまきぬ
 まよハコハまきぬらぬまの油のま
 ちい月もまきぬらぬまの油のま
 運送のまきぬらぬまの油のま

■ 及物扱もあてぬらぬま 考
 及物扱もあてぬらぬまの油のま
 一人の業あてぬらぬまの油のま
 ぬらぬまの油のまきぬらぬまの
 の油のまきぬらぬまの油のま
 ぬらぬまの油のまきぬらぬまの
 とぬらぬまの油のまきぬらぬまの
 ぬらぬまの油のまきぬらぬまの
 ぬらぬまの油のまきぬらぬまの
 ぬらぬまの油のまきぬらぬまの

■ 毛もほりりと蓮の極先 曲翠
 毛もほりりと蓮の極先 曲翠
 の作とて蓮の極先 曲翠
 と蓮の極先 曲翠
 極先 曲翠
 毛もほりりと蓮の極先 曲翠

より早く移す光あるをいふ事ふきて快く
云けむと云ふは飲むかくやと横なるを
せむと云ふは坐する草の供はるし椽先の飛
之草の境は屏き多度因や日経て
るおと云ふは老し一昔は花は茶は
含りり○固地の根は沈むと云ふ

□ 萱のつらみの根は青を以て 弘言
其の草の葉は椽先はちるは椽き若くはト
又立寝草は根を以てつらみのつらみの
根は青を以てトハまつ法も程の声を毛強
し尾まの留まは老とちの独淋くさる
作て椽先よりあつりの椽隙に青と腐
は候なりりと云ふ事根の固あつりの木を
なすけ寝草の体は並おし

□ 古き草は籠は及故押すむ 惟純
其の草のつらみの根は青を以てトハまつ法

初と云ふはつらみの用を以て古き皮は及及
押すむトハつらみの草の根草あると外
の傍あるかこえて押込みむと云ふ
其を入させむと云ふは文人の指之固
阿字は轉一凍三方の根草とはらふは

□ 月影のちもをよる雪の色 支考
其の白及板行けるは唐紙は後ト云ふは
の根を以て月々のちもをよる雪の色
ト云ふは方だあるは但椽は掃出り空お
アト云ふは時法お解りト云ふは掃出り
口おのちもをよる雪の色と云ふは根之固

■ 仕まうて法と云ふは
其の白く月の雪を以てその日お尋する件ト云
ちト云ふは日の用を以て仕まうて法と
云ふは掃出りト云ふは掃出りト云ふは
も交りむモウ在はるは云ふは云ふは

すてハヤ舟人の書て照陰の工事してを
と名ふ拙之△考九条よふハ陰ハつ陰の照
之固後人ハハし因あり

□ おまごころ身はゆき橋のあ 霜
まをまをてまごころの照陰は自替とてち
其人と行えりまをて工事して天文未えお
陰年の老ハ朝夕新ますむ橋中との因
や古柄のつら橋中ハ歳世ら身ハゆき
らるゝふト紀書らるゝもまをれり力そさ
るるも志ぬ又盲者ハ橋中くと去りま
まをてゆめりも我おるるの世々の撰集
りし出て系圖正しき考くと陰りくお
陰る拙之陰九し

■ 持佛乃起不夕日持てむ 翠
まをて身の上を身はゆきまをて橋中
此漸悦する体と又まをて陰をけりくお

仏の白く夕日持てむハ只一なるのまを小なり
まをて持仏ハ横日さ守は持てける飯あり
すの大切あるまをては陰ははすすやう
勿断しと身はゆき力そぬて何年ハ口さ
まをて陰あるまをて戸もも求もやと志を
新りるまをてまをてり○因照陰の工事
まをてや陰の通圖とて橋の中をま
夕日まをて橋のつら角まをて通圖の本像と
けりくハまをて陰りまをて

○ 平睡は菜をたき下首治 老
まをて及の持仏夕日さたとまをて件ト又
まをてまをて陰をけりく平睡は菜をたき
下首治ハ田舎に端送は辺より向乃
あけりむとまをて月さるまをて及のま
細中まをてまをて端送はりまをて
苛て及の及の及。はる端まをて及の

拵あてに月の蔵敷とあり

□ 障乃日わすれぬを 拵

▲おのお病と一日まぢ守後先より作ト又
立其敷意を付たり障乃日わすれぬを
トお病の目たむとつとおまき也也
と疑ておの障乃日わすれぬと先
をうしるる実い九七の大を拵あてに
障乃の意をぬきよく連立ててきたり
向作も細くも障乃日わすれぬあり
○固より本等はぬ

▲ 吹んまをせぬ所の引ま 拵

▲おのえ日を名て障乃日わすれぬを
用意を付たり吹んまをせぬ所の引ま
よちと試てコレや悪はかお守の栓引
抜の位ぢや向い先をばしきうをぬ
すいようむと名利をすり拵之固より

□ 急務に舟を舟へ張る 拵

▲おの急をト連吹んまをせぬ所の引ま
一は詞と又立其意の用を付たりまをせぬ
い舟舟はぬハ大極まきるお又おの
人之世の船中備との為向は船これ
い障乃より抜はれしやて安一おの
ま度潤く又向もい舟よのれいさき
拵をてあらん拵之○固戻伏又ぬ

□ 射付し文書の束を月の書 拵

▲おの舟位い書の束を月の書
立拵まし拵を付たり射付し文書の束
うる月の書よ拵あまの使あむつ
おあしと名たりイヤちとくも
先方を張るれと継の信解た
るはし連ましと舟人の出守拵
あれい書よあ守団双左射の付る拵

とも更向のあふも封をけしふ故あきま
し字けりし片○固持女あきまの包と
又て月又の作は匿回たは降届す客の
舟よえ之故て外のはくりしとす付玉え
より実入伏束する指は揮まぬ

■ せらろくあつく多の上揚尻 考

あも封けし文家の末るる月の香いんかき
二は初とえは取次の人をけりしそろくあ
りくおの上揚尻よ二匹友のおや御守
ぞうれとまふしやむそを紙そろく
実きせ後引て舞く出るとア山廣方の
女い病老のあつく指よ生ぬらん是えちやは
多の香合持此きま使の侍他もあつす
と名や指ご○固子奪身只あえ後乃指巨
[書] 志兵兼之在如の他人い今も指かしの
下き女の名目せらろくと志下ん乃連てくる多

一 是久門の余喚く

□ 虫世新なる尺条の角は河原町 慈

あもそろくあつくい多の市おえる作とえ
立及坊の指をけりしむとつる尺条の角乃
河原町よあ人のお侍は出ると中まの
祇屋指の海さ指やの門よえて小僕よ
むとあきまの侍は慰めむと持する指ご
■ さる俄とあくる表一箇 翠
あも果つるむとつる尺条の角の河原町
トあか河とえき送れをけりしまをさよ
表一箇よは後表と二丁車の言せ門より
舟の小丁指よおて指をやら指ご○固二句二
はハ並おく

□ 今の乃よ終と又隠す橋の上 三

あもるまを橋の上より橋高の精えすと
又高し作よえき又曲りを行き今のも

は後を又屋寸檜の上より入りて、ちよ
日那の供養に奈檜を走りぬけ、
田舎出の下帷のおろく候、そ追ひ
之固舟入るるは、供養は

● 大さな檜のどんぼり
其の今のうちに、後を又屋寸檜より入りて、
又、後多く通るに、戸あつ手檜の檜を
り、大さな檜のどんぼり、八、九、十、の
お、ゆきをくり、列の、我、郡も、あ、ま、さ、る、書、次
は、檜、敷、也、く、後、の、後、も、檜、か、く、一、檜、の、ま、も
後、だ、る、檜、の、固、又、ま、ま、は、純、あ、と、行、く、り
は、檜、の、こ

● 臥せる藤子
其の、大、さ、な、檜、は、日、枝、山、清、堂、の、後、つ、く
件、ト、又、五、二、山、集、る、檜、を、行、く、り、ま、ま、あ、る、む、り、も
麻、押、を、て、八、月、子、も、ま、ま、も、三、十、坊、の、子

後を、集め、天台の、法、灯、を、挑、て、佛、法、無、際
と、ま、う、る、り、後、る、あ、ま、さ、檜、後、世、い、む、り、後、ま、
時、く、ま、ま、の、後、の、ま、く、廻、る、人、の、麻、押、を、て
あ、ま、ま、ま、ま、と、ま、あ、る、檜、の、固、初、ま、の、山、は、は

● 腰を、通、る、檜、乃、下
其の、白、盛、あ、る、む、り、門、ノ、麻、押、を、て、人、に、
外、へ、ま、余、る、件、と、又、ま、ま、の、後、を、行、く、り
腰、を、通、る、檜、乃、下、八、初、ま、の、檜、乃、下
門、内、門、外、の、む、れ、い、り、も、又、ま、の、檜、乃、下
の、奈、店、も、床、儿、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、
○ 固、ま、ま、ま、ま、と、け、あ、ま、あ、開、の、ま、ま、ま、ま、
は、八、初、ま、つ、く、り、八、初、ま、を、後、ト、又、ま、ま、
又、あ、開、る、人、の、下、は、麻、乃、下、△、ま、ま、ま、ま、
集、中、乃、一、の、出、束、お、く

後、存、在、終

一才の 十老 昂一

才五才七の二老更中うて傍ふも
炭俵の中お位と才八才八の二老
更次も才九の老炭俵の下お位
む才一才二才三才十の四老又一段も若
者うむ位令け尺老を除くもすみ俵
下下積あむむ

一初歩 昂二

一日百句あふれはあそぶの精振も
乃守おるも舎釈も多うれと頼る
題うする一歩はさる

古東古の没多うとらとさる毎極
何れむとて白くの骨を截改ちおお
きいるの序は後いおりう字老は初別
うて社中の白とあしお私のお歌
うむ古き評云の故うありん

七部波女心録七附録 曲齋 注

○延宝五丁巳初懐帝

百韻 雨吟

梅は花はも初着の晴はし 翁

梅は花はも初着の晴はし 翁
の繁葉をえて年もも初着の晴はし
ふふと良無しておまの夜をを末て
不吉のま行竹依りのま行草は六段もて
案ツ所はる不吉の竹と松あむは石易依
りは趣向のえ方さつひま行草は白作
の作さつう梅はもも年もは石易のえ合
おと年も初着とをう考を優る草作の
作とあまむ人い先は信さん信

■ まうてや植人万れ作 信孝

余白二月の梅盛る此の代捨生の良景ト
又まもまの余情を付るまうてや植人

万の作は比は博も初きをあけらばも初
きを帰さむとてとて招く因縁身はツムを
種として万は多きをあけらるる野むよ
くきゆるすむ博の声さきらひ生とく生
お何れも身を旅さるるは博を合てきて
甘人万の作とてを年も初きを帰さむ竹ぬ
招きひい且耕化一文作とを年をさるる合は
木白の心をとりし招き海印印す才道と号し
りもやけ時よりか格定るるを早はき
を正風の招とて出らるるはは多きを
□ 万は此種く考ふる世中よ 奉
余も作字博おの博とて人万の作は初と
又互他辺の博とてなりまき博の種う博は
さるるの中よよりさ博よもの意明く他と
博の博の如き水は博とて出るる考はれて
博とあるとお集する招の通付く

■ 旅こそ交の世は下三朗 翁

余も去るの種う考やまくる世中よとて
房の件とて互交博の後笑を付たり 旅こそ
交の世の下旅とるる交の丹去博の中
より博考とるる上とすくじと博はも博
昔去のうけ辺い意博旅とてあく日あ
萬付去るの博房おお形博の博りる
よの中よより博の利ぬ博と人よ旅とて
考とるるくくと博を交の世の下旅は
古去の考とて房と招くへ初の中よ博
と考るる法は初考とて佛頂博は考とて
後多博のユ交とて交は博とて七アの
中よもは博多とてと主厚保後の博考と
下きるる初博の博考とて入るる考と
■ 博考と考と乃まきり夜
余も初の下旅は考と考と考と考と上

七字の准云々祝およ又立世社の招き付
り招辨と云はるの招衣上小招辨持り
て招きするを云はる女中の持来せむと云
ふち押あはしは男成てあしくするもの
まこと女の孫子をソレト云強又云後で
世地を招きをしりたるをイセお置まふ。世の美
女の招衣志の子此れ限去れまはし去
結食記にては世後始、果おを他く
風情△豊あむと云わし招辨の長久
媒と云る人界のお居はるかゝの匠と云
する余情僧秘の中よ人心をまゝと云む

■ むうー梯招男ありん座 素

▲まおまはる招財とて勇しく招辨する件
又立世社の長長をたたり昔傳の男お
りう十八浦降及の是男の行出て肉する
を云てイセお置一箇くの發陽むむー

男おるりは詞の秀白もて今佛く男
の男おをおもす招こ

■ 眠のひびけ初る世の月 素

▲まお若より今よ日毎く東より西へお
佛四る月の桂男ト又立世形雲をけり
り眠の完初る世の月トハお月比乃
ら月くはまき夫も休するあゝ強ゆるお
まあより切むと云すむ招△若田カ
桂男ト云るはよ□月ト係するはさす
ける法さア集中も多し又准付の後
を祝おとるるも敷よ定する法之定ま
後林と蕙門とのおとつそむ九後林の
風の准おの寓云よ又准云と云るゆりて
詞の上のこお射多し蕙門まる寓云
ある射に決極て姿あるおよ又さるる中一
の中僅二三字の准云と云るも亦もさる

るはさきききと正風よあそび延宝の
ちしめおがらるう法を筆執して佛世を完
ぬつと今の今うをこそあきる人のそ
あつてたよ不伝のあつても

□ 法南たてておくわー引の山 翁

▲あつての冥初るニトサキセの月は初
とんを歩りれお交をたつて所をててく
は引の山よおぬよ山くゆく推矢の胎を
いこい通はる月よおれ踏くちんをひくら
てく所をゆくをいとはるむむお男のわ
さふとちやる指く△あー笑ハ山の徳を
くひくちんあるをちんもあるよをくちん世
そんはらちおの胎は准ををたわううう
草休のきい准対多ー美由あーてささ
を免後林のきとあつて

■ 五寸夜手の届さる身死乃 素

▲あつての冥初るニトサキセの月は初
とんを歩りれお交をたつて所をててく
は引の山よおぬよ山くゆく推矢の胎を
いこい通はる月よおれ踏くちんをひくら
てく所をゆくをいとはるむむお男のわ
さふとちやる指く△あー笑ハ山の徳を
くひくちんあるをちんもあるよをくちん世
そんはらちおの胎は准ををたわううう
草休のきい准対多ー美由あーてささ
を免後林のきとあつて

□ 一かみあまり恒より乃松 翁

▲あつての冥初るニトサキセの月は初
とんを歩りれお交をたつて所をててく
は引の山よおぬよ山くゆく推矢の胎を
いこい通はる月よおれ踏くちんをひくら
てく所をゆくをいとはるむむお男のわ
さふとちやる指く△あー笑ハ山の徳を
くひくちんあるをちんもあるよをくちん世
そんはらちおの胎は准ををたわううう
草休のきい准対多ー美由あーてささ
を免後林のきとあつて

の乃もやけみれい住吉の神祈て人よ
華ぬくと表りし□の逢付く△此す字の姿
を定て身よまの届ぬ出方をまよ福く
コハあむと表りし□の逢付く△此す字の姿
体のまよい又も趣向よ也言ふべき財は白作
よ曲意を用ふその物節能配よ序被
志のまよ田表あり定よありとくられ又
るの次まをばて改む今定よ目をとむへ
さう知れいかく教信のく積りて曲言よ佳
さる作者の自在力之やよ大ね認めむ
學士の前く古人のつとまらるるを能のま
りう再とくるを能き冷暖自知てとく
後登の志と批よ我いひすて文人をまら
強るとりか
凡ちめて及さるとる機宜誘引強吟
陶法の記およよけりまき人とおへ守く

機開之翁正風完發の始機直すりよまの
草体とりて後林の法を尋りしはまら
天和の次韵まらりたりも機宜してま中
の草能曲言をありあり門人只如能事如
啞かくては能るありむと定よ向上の度
を下て志栗よわけ強よを日よ誘引
一あふ又角嵐雪松風うまるとを能
くまら遠よ強何を文法れと陶法の持よ
動い晋子のくありむさうよえ祿の比よま
て欠門の於世よありあり後林の教もあり
まきえ羽の枕社も平活よ変り世言ふ
る物も延室の曲言よ似付今強まらよこれ
強ちよ正風の用りありき後林の工も延室
の機宜も並ふ人能力拙くて字はさる
よおのつと地よ持ありありむまら志栗の
比きいやりありありおの羽の振る掃面を

及び其志を及びるや木因支考深甚乃
 三子侯子行草の作をりるや凡余の
 麦林山隣余亦不又次子及び老圃と死
 き志ありて乎と自己の如毎のこりて
 止ぬる人又傳う法を多るる故之宜
 あるる祖翁正統の門人たよ自在庶乃
 人をも稀あれも此は草然一作は難
 中之難毎過此難もいふ所らむさり
 あり今やかく余その糸口を解てまは
 せりそりて毛序き糸のくり分うこり
 とらるるそ海人を志し先志度のを
 たまきのむうを今より返りててよ
 うと返ましくも常ふるやま草

弟也え毎庚申の季ま

波の心録大尾

復古 蕉門 曲齋先生著述目錄

貞享式海印録

全六冊

海印録續編題

掌中海印録
 抄本

七部婆心録

附句見多

年浪撰州

同 後編 追刻

蕉門依式の書世をまるといふも
 類古式と混しられ祖翁の山式と
 正一抄句と奉て法と論たる也
 先書よりねい法式柄を
 とありし也

先玄の中より指合去後及月玉の
 抄い人備五我の別格くの
 と後幸たる序と後利乃也

七部婆心録の序よりせく附句と持の
 一七部解り二百年来
 一七部あるまを海印もなり

附句見多の二法よりして
 一七部解り二百年来
 一七部あるまを海印もなり

年浪撰州の注書世より多くして
 一七部解り二百年来
 一七部あるまを海印もなり

同 後編 追刻の注書世より多くして
 一七部解り二百年来
 一七部あるまを海印もなり

四季文のし料

世にのちとせし田舎と改く
性利便利のなるものなり

正風類題集

初編五冊

書不類題の書多しといへども平句
己下の物と混して数句の二と
多しと云ふと云ふと云ふと云ふと
且つふと云ふと云ふと云ふと云ふと
事なれり侍と云ふと云ふと云ふと
乃便と云ふと云ふと云ふと云ふと
経と云ふと云ふと云ふと云ふと

同 二編

同三編四編續く如子 宝曆己未の句と云ふ

己未の句と云ふと云ふと云ふと云ふと
書化の用と云ふと云ふと云ふと

公卿の書 之の法沙 再刊

公卿の書 之の法沙 再刊
公卿の書 之の法沙 再刊

表八句世の句と云ふと云ふと云ふと
柳子老人自伝と云ふと云ふと云ふと

獅子百韻七部集 新不句。表活記。三返括。技山伏
古先佐化。在の山と云ふと云ふと云ふと

改俳諧袖珍抄 古と写誤及名をあるありしを
先中の訂正と云ふと云ふと云ふと

笈日記 梟日記 再刻

播州 姫路

灰 屋輔 二

備中 倉敷

太田屋六 藏

備後 福山

笹 屋喜兵衛

雲州 松江

尾崎屋喜三右衛門

因州 鳥取

油 屋仲 藏

藝州 廣嶋

世並屋伊兵衛

長門 萩

山城屋彦八

下関

野上屋権左衛門

豊前 小倉

中津屋卯助

肥後 熊本

小嶋屋義八郎

肥前 佐嘉

紙 屋惣右衛門

心齋橋安等町北

秋田屋太右衛門

全博勞町北

河内屋茂兵衛

全南久宝寺町北

伊丹屋善兵衛

全心齋橋南

松村九兵衛

全南本町

森本専助

全本町北

鹽屋弥七

墓

浪

